

観光まちづくりに向けた提案【海南省】

近畿観光まちづくりアドバイザー会議
平成19年3月14日

◎ 現状

平成17年4月1日に下津町と合併し、現在、同市には「黒江の町並み」「藤白神社」「長保寺」など多くの観光資源があり、特に国宝に関しては県内7つのうちの4つが存在している。また、下津は「蔵出しみかん」や全国4大産地の一つとされる「びわ」などが特産となっている。

観光振興の施策として、JR西日本とのタイアップによる「ぶらり海南あるき旅」、黒江の町並み散策（語り部のサポート有り）、熊野古道散策コース（藤白神社起点）などを企画し取り組んでいる。

◎ 観光資源

- *施設関係・・・国宝 長保寺・善福院、黒江の町並み、藤白神社、紀州漆器会館、鈴木屋敷、（熊野古道）
- *食関係・・・・下津みかん、びわ、鈴木さん弁当
- *イベント関係・・・ふるさと海南まつり、紀州漆器まつり、ふるさとまつり in 下津
- *その他・・・・和歌山マリーナシティ

◎ 提言及び提案

【提言】

多くの来訪者がある和歌山マリーナシティ及び熊野古道と市内の黒江の町並み等を有機的に結び付け集客力の向上に繋げる。

南紀・白浜温泉などのからの立ち寄り先としてプロモーションを行うとともに、黒江の町並みの整備・活用を図り、海南らしい土産物等の商品開発、ブランド化を図る。

【観光まちづくりについての提案】

(1) 推進体制

- ① 和歌山県・和歌山県観光連盟及び和歌山市との協力関係の強化が必要。
- ② 土産物店、旅行会社及び語り部ボランティアとのコラボレーションの強化が必要。
- ③ 隣接の大規模集客施設「和歌山マリーナシティ（年間200万人来場者）」との連携強化。

(2) プロモーションの方法

- ① マリーナシティとの連携を密にし、市内観光(黒江の町並み散策等)をオプションツアーに組み入れていく。
- ② 観光資源を組み合わせ「海南ならではの楽しみ」をスタンプラリー等の具体的なメニュー発掘により、個人旅行者(家族旅行・グループ旅行等)の集客を図る。
- ③ 黒江の町における紀州漆器会館での漆器蒔絵体験コーナーや漆器職人の

実演等体験プログラムと語り部中心のプロモーション展開を図る。

(3) 受入環境整備

- ① 高速道路を降りてからの観光案内看板及び観光地の駐車場(増設含む)整備。
- ② 鉄道駅周辺及び市街地の観光案内看板の整備。
- ③ 観光スポットのパンフレット(多言語含む)及びホームページ(多言語含む)等情報発信の整備
- ④ 「黒江の町並み」の町並み整備として、電柱の地下化、歩車の分離、店舗内外の景観、ベンチ配置、観光案内板の設置、町限定の土産物開発等が必要。
- ⑤ 「黒江の町並み」「熊野古道」での語り部・語り手の人材育成及び語り部の有料化。

(4) 個別の資源の活用

- ① 「黒江の町並み」=すでにツアー立ち寄り先になっている黒江の商店の営業時間を延長し、買い物が楽しめる立ち寄り先としてアピール。町並み観光は付加価値として語り部ではなく語り手をソフト戦略とし、マリーナシティ来場者の中核をなす若年層に漆器の魅力を打ち出す
- ② 「藤白神社」=熊野の入口という位置づけをアピールし、古道歩きファン層への訴求力を高める。鈴木姓の発祥地という個性を活用するため、古道歩きの来訪者が携帯できる『鈴木さん弁当』(ゴミ対策から柳行李で)を販売。経済効果が現れにくい古道スタートポイントを逆手にとった戦略を構築する
- ③ 「鈴木屋敷」=建物、案内解説板、周辺アプローチなどハードとソフトを整備することで、海南にしかない貴重な資源となる。
- ④ 「長保寺」=藤白神社から始まる熊野古道と連携した誘客を促し、住職など寺の歴史を学べるソフトを整える

観光まちづくりに向けた提案【日高町】

近畿観光まちづくりアドバイザー会議
平成19年3月14日

◎ 現状

「徳本上人生誕院」は、知名度の点から集客力に乏しいが、体験観光については、農業・林業・漁業等を様々な体験プログラムが用意されるとともに、これらを掲載した「まるごと日高体験マップ」が作成されている。

また「紀州日高ウォーキングガイド」などに見られるように近年の健康志向に対応した取組みにも力を入れている。

◎ 観光資源

- * 施設関係・・・徳本上人木造坐像、徳本上人生誕院、道成寺、(熊野古道：内原王子神社(高家王子跡))
- * 食関係・・・・南高梅、梅ジャム、ホロホロ鳥、クエ
- * イベント関係・・・クエ祭り、地引き網バーベキュー、
- * その他・・・・農業体験、林業体験、漁業体験(みかんオーナー・ログハウスづくり)

◎ 提言及び提案

【提言】

「徳本上人」を地域の個性、独自のものとして外向けにアピールしつつ、地元の理解を深めるとともに地域の歴史遺産としての確立をめざす。その上で、情報発信のあり方を見極めていく。

地引網で獲った魚を自分で作った備長炭で焼いて食べる—といった、多様な体験プログラムの連携を図り、地域での時間消費を増大させる仕組みづくりに工夫を。また、多岐にわたる自然志向・健康志向のニーズをとらえ、まずは既存資源を有効に活用し、プロデュース、コーディネートする窓口を立ち上げる。

【観光まちづくりについての提案】

(1) 推進体制

- ① 行政主体の推進体制であるが、それぞれ周辺自治体・関係機関の協力体制の強化及び観光振興における広域連携の構築。
- ② 地元受け入れの熱意もあり、京阪神からの利便性の高いアウトドアフィールドとしての教育旅行受け入れ体制の充実。

(2) プロモーションの方法

- ① 徳本上人の生誕地をキーワードに持つてくるためには、全国に点在している名号碑などゆかりの地をネットワーク化し、生誕〇〇年など記念日を活用

したキャンペーンを展開する

- ② 多種多様な体験型観光資源を単につなげるだけでなく、ストーリー性を持たせる本物のプログラムのセレクト、そしてそれらのメニューが生かす仕掛けづくりが必要である。
- ③ パンフレットやインターネットを単なる観光資源の紹介の手段としてとらえるのではなく、観光客にとって本当に有効かつ価値ある情報の発信ツールとして、改善・工夫をしていく必要がある。
- ④ エリア及び客層のターゲットを絞りこみ、観光資源がもっとも生かせるプログラムを集中的に売り込んでいく。また、その活用状況などを継続的に有効分析し、内容の充実・更新を図っていく。

(3) 受入環境整備

- ① 観光案内所、ホームページの活用による情報発信の整備。
- ② 美しい海岸線を生かし、「シーニック・バイウエイ」の指定のため、駐車場などの受入れ体制の整備。
- ③ 観光地の観光案内表示・案内所及び統一的な駐車場などの整備。
- ④ 体験観光の総合窓口設置による受入れ体制の整備。

(4) 個別の資源の活用

- ① 「誕生院」＝基本的な観光インフラの整備が必要。徳本上人の生き様を地元の観光ストーリーとして落とし込む地域ブランディングの方策を立てる
- ② 「体験観光」＝ITを活用した空き情報の発信。貸し農園の手法で繰り返し来訪するシステムや、立ち寄り客のリピーター化を促す受け入れ戦略の構築

観光まちづくりに向けた提案【舞鶴市】

近畿観光まちづくりアドバイザー会議
平成19年3月14日

◎ 現状

赤レンガ倉庫群・引揚記念館等、五老ヶ岳公園等観光素材は豊富であり、フィルムコミッションの設立、行政と住民共同の肉じゃが祭りの実施など、行政・観光関係者・関連事業者による地元の観光客誘致に対する取組みは意欲的である、また、市内観光周遊バス「プリーズ号」を平成19年度から毎日運行する予定で、各施設の入館料と合わせた売り出しを図るなど二次交通の利便向上にも取り組んでいる。

◎ 観光資源

- *施設関係・・・赤レンガ倉庫群、引揚記念館、ふるるファーム、五老ヶ岳公園、とれとれセンター、田辺城、海上自衛隊基地、田辺城資料館、金剛院等
- *食関係・・・肉じゃが、かに、岩がき、丹後トリ貝
- *イベント関係・・・みなと舞鶴ちゃったまつり、赤レンガフェスタ、吉原の万灯籠舞鶴さかなまつり
- *その他・・・野原漁業体験、

◎ 提言及び提案

【提言】

当面は周辺地域からの立ち寄り先として、プロモーション及び受入体制の整備を図る。その上で、従来の舞鶴のイメージであった「岸壁の母」に依存するだけでなく「みなとまち」、「赤レンガ倉庫群」、「海軍」などを活用して新たな舞鶴のブランドづくりを行い、外国人観光客も視野に入れた滞在型の観光地づくりを行う。また、これを総合的・持続的に推進するため、観光振興のための戦略プラン・アクションプログラム等を策定するとともに、民間におけるプロデュース役となる人材を育成する。

【観光まちづくりについての提案】

(1) 推進体制

- ① 行政・観光協会・関連事業者・市民の意欲は感じられるが、一体感に乏しい。取り組むべき方向を見極めるための議論の場を設け、併せてリーダーづくりを行なう。
- ② 周辺自治体との協力体制強化
- ③ エリアで見た場合、東舞鶴・西舞鶴の整備と連携
- ④ 台湾や韓国、環日本海の交流拠点としてインバウンド誘致体制の推進。

(2) プロモーションの方法

- ① 港や自然の景観をベースに点在する資源を組み込み、舞鶴のイメージを作り上げる。そして、そのイメージの売り込みに特化する。

- ②赤レンガ倉庫群、海上自衛隊などを目で楽しむだけでなく、体感できるようなプロデュース・演出を行なう。まずは協力体制の確立が必要である。
- ③泊の面が弱いという見方があるが、周辺地域の宿泊地を活用した仕掛けを工夫する。また、既存の宿泊施設を生かすためのプログラム（泊食分離など）の可能性を検討する。
- ④ 広域連携を促進し、宿泊後の翌日観光や日帰り観光にターゲットを絞り、立ち寄り観光の目的を単体ではなくストーリー性を持たせ提示する
- ⑤ 単体でもっとも入込客数が多い「とれとれセンター」に市内観光のインフォメーション機能を持たせ、他施設を絡めたオプションルツアーを造成

(3) 受入環境整備

- ① 滞在時間を伸ばすためにも、周遊が可能な足の確保が必要である。例えば、利用しやすいバス、レンタサイクルあるいは低廉な観光タクシーなどを用意し、観光客が選べるバリエーションとし、周遊しやすい体制を構築する。
- ② 「舞鶴ブランド」としての食を売り込むのであれば、食を楽しむ場の提供が必須である。PRが先行ししているように思えるので、まずは施設の確保・協力体制の構築、情報の整理に努める。
- ③ 宿泊を捨てるのではなく宿泊目的地として1日3400人収容の規模を生かし、ビジネスホテルの週末稼働を促す泊食分離のプラン化、ナイトライフの楽しさを創出する仕掛けによって宿泊する必然性を持たせる
- ④ 市内東・中・西の違いを鮮明にし、時間消費の拡大を図る
- ⑤ 二次交通の弱さを逆手に、赤レンガや港町サイクリングを市内観光の手段として確立する
- ⑥ 観光パンフレット・ホームページ等の情報発信の整備。

(4) 個別の資源の活用

- ① 「引揚記念館」＝ガイドを前面に打ち出すことで、歴史観光や平和教育の施設として若年層も吸引
- ② 「赤レンガ倉庫群」＝レストランやカフェを設けウォーターフロントとして交流拠点化を進める
- ③ 「ふるるファーム」＝旅行会社との予約システムを確立し、時間待ち客に体験や買い物で楽しませる工夫
- ④ 「五老ヶ岳公園」＝景観や夜景を生かしたプログラムの開発と花回廊の活用
- ⑤ 「食」＝肉じゃがなど港町の食を提供する飲食店の開拓と自衛隊人気店の情報発信

観光まちづくりに向けた提案【宮津市】

近畿観光まちづくりアドバイザー会議

平成19年3月14日

◎ 現状

日本三景のひとつ天橋立をはじめ、豊富な観光資源に恵まれこれまで多くの観光客を受け入れてきた。宮津市としては、天橋立のみに依存しない観光地づくりをするため、まちなか観光の推進、自然体験・環境学習の資源化、海を活かした誘客（海上交通ネットワークの構築）、食の開発など観光振興に積極的に取り組んでおり、2010年に観光入り込み客数300万人（2006年は244万人）を目指している。

◎ 観光資源

- *施設関係・・・天橋立、由良川鉄橋、ハイレク酒造、海と星の見える公園、宮津ヨットハーバー、天橋立温泉、宮津市街（大頂寺・三上家）
- *食関係・・・宮津の大トリ貝、岩がき、松葉がに等
- *イベント関係・・・桜祭り、宮津灯籠流し花火大会、天橋立冬花火、松葉がに漁解禁
- *その他・・・丹後海と星の見える丘公園、定置網体験ツアー（養老漁業）

◎ 提言及び提案

【提言】

天橋立を環境保全のシンボルとして活用し、景観整備などの町を挙げて環境に配慮した観光地づくりに取り込む姿勢をアピールし、このコンセプトに沿って既存観光資源の活用と新たな観光資源の発掘を行う。

また、従来からの天橋立ブランドによる集客力も活用しつつ、近年増加している台湾をはじめとする訪日外国人観光客も含め、ターゲットを明確にして、その志向にあわせた観光地づくりとプロモーションを実施する。

これらを総合的・持続的に推進するため、観光振興のための戦略プラン・アクションプログラムを策定するとともに、民間におけるプロデュース役となる人材を育成する。

【観光まちづくりについての提案】

（1）推進体制

- ① 天橋立にプラスアルファの観光資源を付加し、時間を消費させる仕組みを作ることで宿泊誘致を行う。そのためには舞鶴市などとの広域連携も視野に入れる
- ② 自治体・旅館や飲食店・交通事業者等との協力体制強、
- ③ 観光振興の担い手となるリーダーの育成と、観光協会の組織強化。

（2）プロモーションの方法

- ① 天橋立という唯一無二の観光資源に、環境保全や癒し、健康といったキーワードで「五感で体験する」プログラムを構築する
- ② 食をはじめ食後の体験、エンターテインメントを充実し夜の楽しみを創出

する仕掛けによって宿泊する必然性を持たせる

- ③ まちなか観光や体験漁業、環境学習を宿泊客向けにオプションツアー化する

(3) 受入環境整備

- ① 天橋立に頼らない観光素材の発掘・磨きこみ及びターゲット（宿泊客・日帰り・ファミリー・団塊世代等）の絞り込み、観光の情報発信の充実。
- ② 市内観光ルートとして散策マップ、案内看板等の整備。
- ③ 駐車場の整備、レンタサイクルの充実。

(4) 個別の資源の活用

- ① 「KTR」＝沿線の入場施設と組み合わせることでパーソナル型のオプション商品化を図る。また、由良川を歩いて渡るなどのイベントの検討を。
- ② 「ハクレイ酒造」＝宮津～舞鶴間の立ち寄り見学場所として有望。旅館・ホテルと連携した「酒蔵コンサート」などの開催を。ただ、場所がわかりにくいため案内標識の整備が必要。
- ③ 「宮津ヨットハーバー」＝来訪者ニーズを的確に把握したうえで、ルート設定、運航計画などを検討することが重要。学生向けの体験プログラムとして活用は可能。
- ④ 「宮津市街」＝大頂寺、三上家など散策の観光素材はある。ただ、ルートとしては未整備。案内看板、マップ(拝観可能な寺、不可能な寺などの区分を明示)や駐車場など観光インフラを整備し、街歩きガイドは将来的に有料化することで天橋立発のミニツアーにより集客を図る。レンタサイクルや電動自転車も活用する。
- ⑤ 「天橋立」＝オンリーワンの観光資源であり十分魅力はあるが、ボランティアガイド同行プランなどで資源活用の充実化を図る。なお、天橋立ビューランドは、周囲の環境からそこにファミリーランドのある必要性に疑問もある。また、駐車場、リフト代と見るだけでお金が必要なことも再検討。
- ⑥ 「養老漁業」＝地引き網に比べれば定置網体験は珍しい。早朝の出港は観光客には不向きだが、天橋立地区の旅館・ホテルとタイアップし、宿泊と体験をセットした売り出しによって集客を図る。
- ⑦ 「海と星の見える丘公園」＝食事と体験の組み合わせで学生、労働組合など組織団体の誘客が見込める
- ⑧ 「食」＝トリ貝単体での集客はむずかしいが、宮津湾の豊かな海洋資源を活用し食の多様さを打ち出す